# 大谷治男氏に聞く（陸上競技部の思い出）

※昭和三六年商経学部商業学科卒

**東京大空襲により千葉県酒々井へ**

私は昭和一三年（一九三八）、東京都墨田区向島で生まれました。昭和二〇年四月に小学校に上がるという年、三月一〇日に東京大空襲がありました。父が郵便局に勤めていたので疎開できず、荒川の土手から五〇〇メートル位のところに住んでおり、空襲が始まりすぐに土手に逃げましたが、下が火の海になり空も真っ赤になっていて、その光景を一晩中眺めていました。翌日家を見に行くと何もなくて、残っていたのはご飯を炊く鉄の釜だけです。この時、家に行くまでの途中にある水路に、飛び込んで死んでいる人がいっぱいいました。私たちが荒川の土手に逃げる時に、着物を着た芸者さんがバケツの水で一生懸命火を消す努力をしてくれていたのですが、翌日にはみんな道端で倒れて亡くなっているんです。亡くなった人を処理する様子も目にしました。竹を打って丸く囲いを作って、その中に亡くなった人を積んで重ねて束にして、そこへ油をかけて燃やしていました。

そうして二、三日ほど荒川の土手辺りを父親とうろうろしていたのですが、父の実家のある千葉県の酒々井に移ることにしました。財産や貴重品など持てるだけ持っていきましたが、裸一貫も同然です。酒々井ではいつまでも実家にいるわけにもいかないので、近くの土蔵の倉庫を借りて、父は佐倉の郵便局に勤めることが出来ました。当時は藁草履を履いていて、学校には兵隊がいたから山道を通って近くのお寺に行って、空襲警報があるというと裏道をサーッと逃げていったりしているうちに八月一五日を迎えました。

日本が戦争に負けて、私たちも学校に通えるようになりました。小さい頃から走るのが得意というよりも、戦争で焼け出されて酒々井へ行きましたから、遊ぶといってもみんなで集まってトンネルまで競争しようとかそのような遊びしかありません。ただ、学校の運動会ではいつもリレーの選手で、父も郵便局を途中でさぼってでも運動会を見に来てくれたことが今でも印象に残っています。

昭和二六年に酒々井小学校を卒業して、そのまま酒々井中学校に入学しました。私は酒々井で、一級下の小出義雄監督は佐倉中学でした。同じ印旛郡なので昔からよく一緒に走っていて、彼に負けたことはありませんでしたが、後に有森裕子さんや高橋尚子さんを育てて有名な監督になりました。私は戦争で苦労して、田舎で貧乏したので、中学を卒業したら成田の木村屋というパン屋に就職することになっていました。何しろ食べるものに困りましたので、パン屋ならパンがいっぱい食べられます。

ところが、中学を卒業する年の一月後半だったか、今の佐倉市や成田市など千葉県印旛郡の中学生ロードレース大会に出場したら優勝して、それで成田高校から山田先生という陸上の先生が家に来ました。その先生が両親に私をとりあえず成田高校へ行かしてくれと

お願いに来て、両親も先生が家まで来てくれたなら、出来るだけ応援すると言ってくれて成田高校に行くことが出来ました。その父も私が高校二年生の時に亡くなってしまいました。

**断念していた大学進学**

父が亡くなった時、もう高校で陸上をするのは無理だから、父の勤めていた郵便局に給仕で入れと親戚の人に言われたのですが、その時また山田先生が家に来て、自分が親代わりになって面倒を見るから陸上を続けさせてくれと言ってくれて、母も認めてくれたので、陸上を続けて高校にも行くことが出来ました。高校時代には青森・東京間駅伝競走や全国高等学校駅伝競走大会にも出場しましたが、その山田先生もさすがに大学は無理だということで、結局、高校を卒業したら父の勤めていた佐倉郵便局に就職することになりました。

その高校三年生の正月は年賀状の配達手伝いをしていました。今の佐倉市臼井は長嶋茂雄監督の出身地です。佐倉から自転車で臼井の長嶋監督の実家に行くと、大きな家だったので年賀状も多くて、そこで鞄が軽くなりました。長嶋監督の実家に自転車を置かせてもらって、そこからは鞄を背負って走って配達していました。当時は長嶋監督が立教大学の野球部にいた頃です。そのお兄さんに何か運動やっているのかと聞かれたので、今成田高校で陸上をやっていて全国高校駅伝にも出たと話したら、それなら大学に行けと、うちのシゲ（茂雄）もみんなに世話になって今大学に行っているんだからと言われました。

当時、青山学院大学や東洋大学から勧誘もありましたが、私はあきらめていたところでした。ところがその直後に、印西の山本達雄さんから、印旛郡代表で駅伝競走に出てくれと声をかけられました。山本先生は昭和二八年卒の専修大学陸上部ＯＢで、家に泊まった時、先生からも大学に行けと言われたんです。その時に長嶋監督のお兄さんに言われたことが頭に浮かんで、今からでもいいんですかと尋ねると、お前にその気があるなら大学に話してくると言ってくれました。昭和三二年二月後半だったと思います。すると、山本先生が三月八日に専修大学の最後の試験があるからと教えてくれて、受けてみたら合格ということになりました。補欠試験だったと思います。

ところが家族はみんな反対です。それでも長嶋監督のお兄さんに言われたことが頭にあったので、どうしても大学に行きたくなり、内緒で、専修大学の合宿所へ布団や毛布を送ってしまいました。当時の合宿所は二子玉川の砧の手前、中耕地にあり、近くの読売飛行場や砧公園、多摩川沿いが陸上の練習場になっていました。昔あった二子玉川の砧線の中耕地といって、環境の良いところです。家に置手紙をして、国鉄の駅に自転車で蓙で包んだ布団を運んで、そこからチッキで送って、私は大学へ行ってしまいました。

後に大学を卒業して社会人となり、東急建設の役員に就任した

時、今があるのは長嶋監督のお兄さんのおかげだと思い、お酒を持って挨拶に行きました。その後も四、五回伺いましたが、数年前に逝去されました。

**夏の箱根でアルバイトと練習**

夏休みが来た時、大学でアルバイトを世話するという話がありました。当時の陸上部の監督は伊藤貫三監督で、監督は国鉄の大井町工場の庶務課長でした。陸上部でも私とか、常磐炭鉱から来た者とかアルバイトをしなければならない者は大井町工場で働きました。合宿所のある二子玉川から大井町までの通勤は、大岡山まで歩いて、大岡山からは走って大井町に行って、アルバイトが終わったら大井町から多摩川の川崎のほうへ出て土手を走って二子玉川まで帰ってきます。練習のようなものです。

夏休みといっても、みんなは帰るところがありますが、私の場合は置手紙をして家出してきているので帰るところがないわけです。私が大学に入る前の年、昭和三一年一二月に、陸上部の小山国夫さんが箱根の山下りの練習をしている時にバスにぶつかって宮ノ下で亡くなりました。宮ノ下の好楽荘別館のお母さんは「マラソンばあさん」と言われる人で、亡くなっている小山さんをすぐに自分の旅館で引き取って身元捜しをして、親族が来るのを待ってくれたそうです。夏休みに帰るところがなかった私のところに、その好楽荘別館でアルバイトを探しているという話が来て、是非にということで行かせてもらいました。朝は板前さんのお手伝いをしたり洗い物をしたり、お風呂掃除や何かをして、旅館は昼間が暇なので、今日は十石峠まで行ってくる、今日は強羅、今日は小田原までと毎日走っていました。二ヶ月間寝泊まりしてアルバイトしたのでお金もたまり、年末は働かなくても済んだので、選手の皆さんと一緒に練習していました。

ある時、箱根の山下りの選手を決める予選会が行われて、何人かで走ったら、一年生の私が一位になったわけです。アルバイトの関係で夏から箱根を走っていたので、他の人より有利だったんです。

昭和36年箱根駅伝６区で区間新記録

それで一年から箱根駅伝に山下りの六区で出場しました。在学中は夏休みごとにアルバイトに行っていましたから鍛えられました。それで、一年と二年は山下りの六区、三年は花の二区、昭和三六年一月の四年の時はまた六区を走りました。

とりわけ四年生の時は、午前中に合宿所のある中耕地の近くの土建屋でアルバイトをして、午後は砧で練

習の毎日でした。当時は実業団から名馬（名選手）を引っ張ってきていたので、生活費を稼がなければならない選手が多く、一〇人中五人は仕事をしていたと思います。最後の箱根駅伝では私の走る六区の山下りで、中央大学の横溝三郎さんという有名な選手に勝って区間新記録を作り、専修大学は総合三位でした。私はアルバイトのまとめ役をやっていたので、今でもみんなと当時の思い出話をすると、大谷さんがよくやってくれたと言ってくれます。

**大学卒業後、東急の陸上部へ**

私は大学を卒業後、立川にある「リッカーミシン」に就職が決まっていました。当時、リッカーミシンには中央大学の布上正之さんや佐藤光信さんなど有名な選手が入っていて、私も勧誘を受けました。月に一度ほど、有楽町のとんかつ屋に呼ばれてご馳走になったりして、すっかりリッカーに行くことになっていました。ところが、箱根駅伝で区間新記録を作ったら、東急の中村清監督からその直後に合宿所に電話がかかってきて、東急に就職が決まったから来いという話でした。中村監督は早稲田の出身で、瀬古利彦を育てた人です。当時の早稲田は河野一郎や河野洋平がいて、中長距離の中村監督ははじかれていたところを、東急の五島昇社長が昭和三二年に彼を呼んで、東急の陸上部の指導をしていました。私はリッカーミシンに行くことになってるので、東急から来いと言われても困りました。そこで、そのとんかつ屋のお母さんのところに行って事情を説明したら、東急で取ってくれるなら東急に行けと、村社には自分が言ってやるからと言ってくれて、それで東急に行きました。村社康平さんという有名な陸上選手がリッカーの監督でした。

ところが、もう定期採用は終わってる時期でしたので、東急建設のほうに籍を置いて、親会社の東急に出向する形になりました。昭和三六年四月に入社して、六月に行われた全日本実業団陸上選手権大会で二万メートルの日本新記録を出して、昭和三八年の別府毎日マラソンで三位になりました。マラソンの二時間一五分五七秒という記録は当時の世界歴代五位の記録でした。中村監督はマラソンの経験がなかったので、当日は山田敬蔵さんという選手にお願いして、付いて行かせてもらいました。ずっと山田選手の一群に付いていて、折り返したところで、山田さんが先に行けと言うのでどんどん追い抜いて、それで三位でした。山田さんはボストンマラソンで優勝した日本で有名な選手で、この時の私の恩師です。

**東京オリンピック出場をめざして**

東急では運動で入った大谷というレッテルがありました。午後二時になると失礼しますということで、渋谷の本社から二子新地にある東急の合宿所まで帰って練習です。日中の仕事といっても、コピー焼いてくれとか、ちょっと清書してくれ、検算してくれなどといった程度です。同期の連中は立派な仕事をしているのに、自分は若い女性職員ばかりのところにいたらオリンピックに出るという闘

争心がなくなると思いました。そこで私は上司に、オリンピックに出られたら東急を辞める、オリンピックに出られなかったらマラソンを辞める、自分は東急に走りに来たのでもう仕事はしませんと宣言して、それ以降は日中色々な人事の本を読んで、時間になったら失礼しますと開き直ることにしました。

昭和三八年七月、東京オリンピック強化合宿に参加してニュージーランドへマラソン留学しました。他には寺沢徹選手、君原健二選手、円谷幸吉選手もいて、約二ヶ月半、私は円谷選手と同じ部屋でした。円谷選手は福島の須賀川高校出身で、卒業したら専修大学に来ることになっていて、卒業する春の合宿を専修大学のグラウンドで一緒に練習していて、三月が終わって一度家に戻ったら、円谷の父の具合が悪くなって、専修大学に来る話はなくなり、自衛隊に入りました。当時はさほど有名ではなかったので、私たちも円谷は来ないらしい位の感じだったのです。そのような接点があったので、同じ部屋になったと思います。時間があるとお互いに写真を撮り合ったりしていて、今も残っています。

円谷選手は私の二つ下で、真面目な選手でした。彼が自殺したのは昭和四三年一月で彼が二七歳の時でしたが、前年の一二月下旬頃、私は円谷選手が入院している品川の病院に見舞いに行きました。その時、彼は苦しいよと。自衛隊の上官は算術計算でものを言う、つまり三年前にオリンピックで三位だったから、今度は一位だなと算術計算で言う。だけど俺は今小さい子どもが俺を追い越して行っても、その子どもさえ追い越せないんだ、苦しいよと言っていたので、私も、そんなこと言うなと慰めの言葉をかけました。

東京オリンピックの予選は昭和三九年の四月だったと思います。中村監督は中長距離の選手だったからマラソンの経験がなくて、その予選の前に名古屋の中日マラソンで練習として走って来いと言います。私ともう一人東急にいた中尾隆行と二人で走って、中尾が一位で私が二位でした。すると新聞社の取材に囲まれて、まだ三月の冷たい雨、雹のなかで走って、身体も濡れたままでインタビューを受けているうちに私も中尾選手も風邪を引いてしまいました。結局、その二〇日後のオリンピック最終予選には本調子で臨めなくなって、失敗しました。中村監督が、次のオリンピックがんばろうと優しく言ってくれましたが、私はオリンピックに出れなかったらマラソンを辞めると腹をくくっていました。中村監督がいくら言っても辞める決心を変えなかったので、東急建設に戻されました。

## マラソン選手からコーチへ転身

当時、私もオリンピックに出損なってマラソンを辞めて、昭和三九年の後半から五年間、四五年の三月まで専修大学の陸上部のコーチをやっていました。野瀬昭先生の下で、土日と平日あわせて週に三回は専修のグラウンドに行ってました。仕事をさぼって合宿所へ泊まって、そこから会社へ行ったりしていました。合宿所は伊勢原にあったので、今考えればよくやったと思います。専修大学への恩

返しだと思っていました。昭和四五年に大阪へ転勤したので出来なくなって、野瀬さんが野呂進君を引っ張ってきたんです。あの頃はずっと箱根に出ていました。週に三回は選手と寝泊まりして、合宿所で一緒に風呂に入って、選手の性格をつかまなくちゃいけないので。この子は褒めれば頑張る子、この子はダメだ、辞めちまえと言うとこのやろうと頑張る子など、性格を知るには一緒に泊まって食事して風呂に入ってじゃないと。

成田高校へ指導に行っていた時には、生徒に増田明美さんがいました。増田さんを勧誘したのは、陸上部の滝田詔生監督でした。私が大阪にいる頃、滝田監督が関西遠征のある時に必ず飲みに行っていましたが、その時話したのは、スポーツでも会社でもそうだけど、大事なのは勧誘だと、駄馬を引っ張ってきて四年間で名馬にしようとしても無理だから、いかに名馬を勧誘するかが大事だと伝えました。すると、滝田監督が千葉県の夷隅郡にかけっこの速い女の子がいるというので家まで行って勧誘して、増田さんともう一人を自分の家に住まわせて育て上げました。

会社ではその後、役員にまでなりました。陸上で入った人は偉くなった人でも課長になれないぐらいでした。人事の時は運動会を企画したりして、そこで走った私を見た部長が引っ張ってくれて営業に移りました。それから役員にもなり、平成九年には東北支店長になりました。その時、山口義二さんが仙台の秋保にホテル（きよ水）を作るという情報を部下がつかんできて、調べてみたら専修大学の先輩でした。それで私は専修大学で箱根駅伝を走っていた者だけれど是非一度会ってお話したいことがありますと電話して、山口さんの新宿の会社に行って、結果的に私の会社で担当させてもらいました。その後も縁があり、後に私が山口さんの会社の役員を務めたりしました。

東北支店長の時、宮城県知事は浅野史郎さんでした。浅野知事はサンデーマラソンといって、毎週日曜日に仙台の西公園に集まってマラソンをしていて、その情報を得た部下がマラソンをやっていた私にも顔を出すようにと提案して、五キロだけど、初日から知事の後ろについて走ったら、暫く走ってなかったものだから体が痛くてしかたがなかった。けれど、それでもまた次の日曜日にと走っているうちに、知事とも親しくなっていったものです。

**マラソン再開と「来ないか人生」**

その後、東京に戻ってきてから夢はもう一度でマラソンを始めました。ちょうど六〇歳から六九歳まで、三月は佐倉のマラソン、それから皇居の三〇キロマラソン、年末には筑波のマラソンです。ところが、ある時背中と膝が痛くなって、狭窄症と人工関節の手術をしました。今でも膝が一一〇度しか曲がりません。そんな状態ですが、七九歳の今は一日八千歩を歩くことを目標にしています。

マラソンには二つのマラソンがあります。一つは記録マラソン、もう一つは人生マラソン。記録マラソンは四二・一九五キロで、一

番苦しい辺りは三〇キロから三五キロです。三〇キロ走ってきたのにまだ一二キロあると思うとゾッとしますが、三五キロを過ぎると今度はあと六キロぐらいだと近く感じてまた元気が出る。しかし、私たちが今走っている人生マラソンは三五キロ地点を走っていても、ゴールがありません。するとやはり各自が夢と希望、やる気を持って頑張るしかないのです。

私の場合は、すべて、来ないか来ないかと言ってもらった人生です。中学の山田先生に来ないかと、専修ＯＢの山本さんに、それから中村監督、東急の五島哲御曹司にも来ないかと言われました。だから今でも、声のかかるうちは華だと思い、予定が空いていれば参加するようにしています。

振り返ると、私の人生は四部小説です。空襲で焼け出された貧乏生活、マラソンで高校から大学へ引っ張ってもらったマラソン人生、東京オリンピックに出損なってからのサラリーマン人生、そして現在の年金生活です。今は俳句と草笛を趣味にしていて、「ろんど」という、専修大学陸上部ＯＢの鈴木富三男夫人が主宰している俳句の会に参加し、草笛はボランティアで老人ホームで披露したり教えたりしています。

私は人のやってないことをやることにしていて、今は働いていないので名刺がなくて困っていたのですが、一番あこがれていた箱根駅伝に出た時の写真（二八頁参照）を名刺にしようと思いついて、いつも鞄に入れて持ち歩いています。これも当初は写真そのものに名前や住所を貼付していましたが、その後は名刺サイズに収まるように改良しました。

※この記録は、平成二九年六月一〇日に大谷治男氏（昭和三六年商経学部商業学科卒）に対して、北口由望（大学史資料課）が専修大学神田校舎大学史資料課事務室にて行った聞き取り調査をまとめて、大谷氏にご確認いただき、掲載したものである。